

ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

001 ~ 010 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。..... Pack A

001

001 足長手長 /10分

昔々「足長と手長」という夫婦の妖怪が、足の長さや手の長さを使って、毎日里に住む村人たちを苦しめていた。ある日、通りがかりの一人の旅僧が山へ赴き、知恵を使って「足長と手長」を壺に閉じ込め、二度と出られないようにした。すると、村には光が戻り、村人たちは幸せになった。



002

002 明神と博士の背くらべ /10分

村の守り神であった明神ヶ嶽と博士山という山があったが、いつしか村人は里に近い明神ヶ嶽だけを拝むようになる。面白くない博士山は「背くらべ」をしようともちかけ、勝利をおさめて、明神ヶ嶽に引越しをせまる。考えた明神ヶ嶽は、博士山との間にせつせと倉をつくり、引っ越せないようにしてしまった。



003

003 サルとカオスの化かし合い /10分

昔、親分ザルは、魚獲りの上手いカオスをだまし、獲った魚を巻き上げていた。カオスは、冬になると「そろそろ魚獲りを教える」というサルをだまし、氷に尻尾を突っ込ませ、サルが無理に引っ張ると、尻尾が切れてしまう。それからサルは顔が真っ赤になり、尻尾が短くなってしまったようだ。



004

004 下舞木の子育て地蔵 /10分

ある日、ガキ大将だった権太は仲間と隣村に遊びに行き、妹の千代の土産にお地蔵様をつれて帰った。そしてお地蔵様と遊んでいると、長老が汚れたお地蔵様を守ろうとして、お金を払って持ち帰ったが、長老は病に倒れてしまう。聖者のお告げを聞いた嫁がお地蔵様を子供たちに返すと病はすぐに治り、お地蔵様も笑顔になった。



005

005 長法寺の竜 /10分

町のはずれの大きな家の一人娘の竜子姫という姫が大きな病にかかった。姫は父の反対を押し切り、夢で見たかけ沼の水を母親に飲ませてもらい、病が治った。姫は村人たちにもこのことを教えたいと父に懇願したが猛反対される。やがて姫は沼の主である竜に見初められ、妻となり家には二度と戻らなかった。



006

006 八幡太郎義家の大蛇退治 /10分

昔、ある湖に人を引きずり込み、殺してしまう大蛇がいるという噂が立った。ここを通りかかった義家の家来・伏見源八郎はこの大蛇退治に向かうが、蛇に呑み込まれてしまう。この報せを聞いた義家は、仇を討つべく、湖の水を干して、姿を現した大蛇に向かって一斉に矢を放ち、見事に討ち落とした。



007

007 川流れ地蔵 /10分

ある大きな川のそばに住む治平とツネという老夫婦は、ある時、川で不思議な顔をしている鶴吉と亀吉という幼い兄弟を見かける。二人が指差す方を見ると、地蔵様が流されてきていたので、治平が川に入って救い上げた。こうして地蔵様を元の場所に返したが、再び地蔵様はここに流れ着き、この地に留められた。



008

008 万里姫物語 /10分

昔々、山中で一人暮らす呉作という若者が公卿の亡骸を見つけ葬ってやった。しばらくして、今度は熊に襲われている万里姫を助けてやったが、やがて公卿が姫の父だとわかる。傷心の姫を気遣ううちに姫への思いを募らせるが、つりあわぬ恋と思い、沼に身を投げようとする。しかし姫に止められ、二人は結ばれ、それから幸せに暮らした。



009

009 萩山稲荷の萩太郎 /10分

昔、一組の狐の夫婦にかわいい男の子が生まれた。夫婦は長い間交流のない人間との間を取り持ってくれるかもしれないと思い、近くの集落に連れていった。子狐は村人の間でも人気者になり、一人の女の子に萩太郎と名づけてもらった。成長した萩太郎は恩返しに村の災難を鳴き声で知らせられるようになった。



010

010 目治し不動様 /10分

目の悪い稲三の事を心配して、三人の子どもたちは毎日山の麓のお不動様にお参りしていた。ある日、畑仕事の途中、山火事が起こり、逃げていた子どもたちと稲三がお不動様を振り返ると、タニシたちがお不動様の体を覆い守っていた。三日後、近くから清水が湧き出し、それを飲んだ稲三の目は良くなった。それから目治し不動と呼ばれるようになった。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

011 ~ 020 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。..... Pack B

011

011 岩沢の観音さま /10分

農家の長男に嫁ぎ子も生まれたお絹を、姑のお米はいびり続けていた。ある日、乳の出が悪いことを聞かされたお米は、自分のせいだと反省し、岩沢の観音様から乳が良く出るようになる岩を削り取ってくる。それを飲むとお絹の乳はよく出るようになり、それから二人は本当の親子の様に仲良く暮らした。



012

012 きつねうち物語 /10分

昔、あるところに三つの地区に分かれて住むたくさんの狐がいた。狐たちの間では、違う地域のものを好きになってはならないという掟があったが、おこんと音吉はその掟を破って惹かれ合う。しかしその時、この地を通りがかった和尚が機転を利かせて、この掟をなくさせ、それ以来、若い狐たちは自由になった。



013

013 羽衣伝説 /10分

昔々、湖に舞い降りて遊ぶ一人の天女と出会い惹かれた猟師は、天女の羽衣を手にし、地上にとどまるようにと願う。やがて二人は結ばれ双子を授かる。しかし天女は双子を残し帰らぬ身となってしまふ。数年後、子どもたちは母の遺した豆を見つけ、それを蒔くと、天へと蔓が伸びた。子どもたちは蔓を登って天上界にいる母に会いにいった。



014

014 姫君と名馬 /10分

昔々、美しい姫に一目ぼれをした大臣は姫を妻にめとること決めた。その時、姫のかわいがっていた名馬・今帝駒が暴れだした。その夜姫は今帝駒の夢を見、子を宿してしまった。大臣の怒りを逃れ、別の地に流れ着き、そこで子を産み落としたが、馬の様相であった子を目にし、帰らぬ人となってしまった。その後、今帝駒も大臣の追っ手によって命を絶たれた。



015

015 たんがら山 /10分

大昔、神様が一人の大男に「たんがら」を渡し、見晴らしの良いところに山を作らせた。ある日、ヒコはナギを誘ってこの山に登るが、頂上で気持ちよくなり小便をしてしまう。これがお山の怒りに触れ、大嵐が続いたので、ヒコはこのことを親に打ち明ける。そして山にお参りに行くと、みるみる天気は良くなった。



016

016 大沢のにしん地蔵様 /10分

舟運で栄えたまちの居酒屋に、お駒という看板娘がいた。ある時、お駒を取り合う太助と吾助は店で大喧嘩をしてしまい追い出され、財布がないことに気づく。太助が、お地蔵様に財布のことをお願いすると、すぐに見つかった。太助は感謝し帰りにお地蔵様に「にしん」をお供えした。



017

017 剣桂の伝説 /10分

昔、山道にあった桂の木辺りは鬼門と呼ばれ、化け物が出ると恐がられた。弥助とツネという夫婦がここで鬼神に襲われ、ツネがさらわれる。弥助は鬼神退治の松平定信一行に出会い、ツネを助け出してもらった。定信は鬼神を桂の木に封じ込め、剣を刺して留めとしたので、その後この木は「剣桂」と呼ばれた。



018

018 常光寺だんべい /10分

ひょうきんな性格から村人からだんべいと呼ばれている男がいた。ある日、だんべいの噂が城内に届き、お殿様に呼ばれた。お殿様に「面白い嘘をつけ」と言われただんべいは、「今日は嘘の本を忘れてきました」と答えた。「嘘の本」とは「嘘に本当はない」という意味を引っ掛けていたもので、一同大笑いをした。



019

019 小浜のお地蔵様 /10分

昔、小浜に子供と一緒に遊ぶお地蔵様がいた。ある日、近所の子供たちはお地蔵様を連れて川に遊びに行ったが、大雨が降り、お地蔵様は流されてしまい、荒浜という地に辿り着く。それから小浜にも荒浜にも悪いことが起きたが、荒浜の人たちがお地蔵様に刻まれた文字を頼りに小浜に帰すと、村は平和になった。



020

020 飯盛山の弁天様 /10分

ある山奥に弁才天様が祀られていたが、冬は雪が厳しくお参りに行くことができなかった。ある年、村人たちが弁才天様を麓に移すと、赤ベコを連れ、赤飯が入った大きなお椀を持った姉様が現れ、みんなに礼を言い何倍もの赤飯を振舞った。感謝した村人たちは弁天様が祀られていた山を飯盛山と呼ぶようになった。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

021 ~ 030 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。..... Pack C

021

021 権能小狐 /10分

昔々、湖の近くの山道で「権能」と呼ばれる子狐がたびたび人を騙して遊んでいた。権能を懲らしめるために、一人の若者がやって来た。権能はいつものように若者を騙すのかと思いきや、自分の正体をあかし、若者に「狐の嫁入り」を特別に見せてやると約束する。だが、一晩中喜んで若者が見ていたものは馬小屋の馬の尻だった。



022

022 采女物語 /10分

昔、ある村に働き者の次郎と器量良しのお春という夫婦がいた。ある日、都からの使者・葛城王はお春に惹かれ、都に無理やり連れて帰った。次郎を想うお春は月見の晩に屋敷を抜け出し、無理を重ねて故郷に帰った。しかしお春を奪われた次郎は気が触れ、すでに死んでおり、お春も次郎の後を追ってしまった。



023

023 鼻取り地蔵 /10分

昔、弥平とお竹という子室には恵まれないが、毎日慎ましく農作業に励む老夫婦がいた。やがて「しろかき」の時期がきたが、お竹にはきつい仕事だった。その時、一人の元気な男の子が現れ、馬の鼻取りを手伝うが、仕事を終えると姿を消してしまう。だが、帰りがけに、お地蔵さまの足が泥だらけになっているのを弥平がみつけた。



024

024 蟹と鰻の争い /10分

昔、蟹這と呼ばれる滝壺に大蟹が棲んでいた。大蟹は、近くにある大きな淵に先祖代々棲んでいる大鰻から力づくで棲みかを奪い取ってしまう。やがて悪行三昧の蟹を退治するため、奈良から与六という男とともに遷宮した白滝大明神は、大猿を呼び蟹を退治し、村に平和をもたらせた。



025

025 榊衝神社のつなぎ駒 /10分

白河の殿さまが、榊衝神社修復の折、立派な馬が描かれた絵馬を奉納すると、毎日のように村の畑が荒されるようになった。村人が犯人を捕まえようと待っていると、黒い大きな馬がやってきたので、後をつけると神社の絵馬に収まった。村人たちが絵馬の中に杭を描き、馬をつなぐと、畑は荒されなくなった。



026

026 大多鬼丸 /10分

反逆をした大多鬼丸征伐を、朝廷は坂上田村麻呂に命じた。攻め込まれた大多鬼丸はついに覚悟を決め、自らの刀で妻と自分の首を切り落とした。その後、駆けつけた田村麻呂は彼の武勇を称え、その首に静かに手を合わせた。またこの時、大多鬼丸は財宝を鬼穴深く沈めたとされている。



027

027 あめ買いユレーイ /10分

昔、子を宿したが、産み落とさぬまま亡くなってしまった朝日前という女がいた。その頃、近所の飴屋に毎日飴を一つずつ買いに来る若い女がいた。余りの手の冷たさを不審に思い後をつけた店の主人は墓に消える女を見た。そしてそこから赤ん坊の泣き声がするので、掘り起こしてみると生まれて49日目の赤ん坊が飴を握り締めて泣いていた。



028

028 皆鶴姫物語 /10分

源義経は、鬼一法眼という優れた兵法学者の娘・皆鶴に取入り、屋敷に出入りしては日々兵書を書き写していた。しかし平清盛に見つかったために、義経は一目散に奥州へと逃げた。その後を追った姫は、途中池に映ったやつれ果てた自分の姿を見て、池に身を投げてしまう。後に姫を哀れに思った義経はそこに墓を建ててやった。



029

029 ぜに長者 /10分

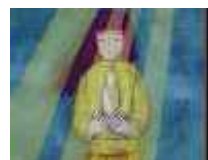
昔、お化けがでると噂の山で寅吉は「オブサリテー」という恐ろしい声を聞く。一目散に逃げる途中でぶつかった太兵衛もまたこの声を聞くが、「おぶさりたかったらおぶされ」と言うと、背中がずっしりと重くなり、やっとのことで家に戻って土間にぶちまける。すると次の日、土間は金貨で埋まっていた。



030

030 蛇骨地藏尊 /10分

浅香忠繁の家来・時郷に家族ともども殺された菖蒲姫は、大蛇となり時郷に復讐をした。それから毎年三月二十四日に姫の怒りを静めるために村の娘を生贄として差し出さなければならなかった。権勘大夫は娘の身代わりにと佐世姫という娘を都から連れ帰った、しかしその日、佐世姫は毅然とお経を唱え、菖蒲姫の魂を救った。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

031 ~ 040 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。.....

Pack D

031

031 与四郎瀧とカッパ / 10分

いじめられっ子だった与四郎は、カッパと友達になり毎日相撲を取って遊んだ。そして万能薬の作り方を教えてもらった。数年後、その薬で村の子どものケガを治してやると、与四郎の評判は遠くの村まですぐに伝わり、与四郎の家の前には毎日行列が出来るほどに人々が訪ねてくるようになり、与四郎を馬鹿にする人はいなくなった。



032

032 文知摺石 / 10分

旅の途中、村人の家に一夜の宿を求めた河原左大臣は、その家の娘「虎女」と恋に落ち、長く逗留したが、ある日突然、都に帰ってしまう。残された虎女が再会を願い、毎日「文知摺石」を草でこすって百日目、石に浮かんだ左大臣の顔を見て息を引き取る。その後、左大臣が虎女に送った歌は「百人一首」に選ばれている。



033

033 水無川のいわな / 10分

昔、水無川で三人の漁師が、川に毒を流して魚捕りをしていた。ある日、彼らの前に老僧が現れ、「毒で魚を捕るのはよくない」といさめた。三人はそれを聞かず、川上へと向かい、毒を流して大いわなを獲った。その腹を裂くと、口に団子が飛び込んできたが、それは理由のある毒入り団子であり、食べた弥助はその場に倒れこみ息を引き取ってしまった。



034

034 河童の詫び証文 / 10分

昔、ある地方に馬場八郎左衛門という名君がいた。ある秋の日、囲碁を楽しむため寺の和尚を訪れたが、その帰り道、近くの川で領民に悪事を働く河童と出くわし、手打ちにしようとする。必死に命乞いする河童に、今後二度と悪事を働かないことと水害から村を守ることを誓わせた。



035

035 日の出松伝説 / 10分

冤罪で流された父を追って、奥方とその子、安寿と厨子王は、乳母を伴い旅に出た。道中、親子は海賊にさらわれてしまう。幾年が過ぎ、佐渡島で奥方との再会を果たした乳母は郷へと向かう。がその地で母と娘が命を落とし、乳母も後を追う。この時、松の木から白蛇が天に登るのを見て、村びとがその松を切ったところ血が流れ出たという。



036

036 朝日長者と小野観音 / 10分

朝日長者の屋敷に逗留した有宇中將は娘の朝日姫と結ばれ、子を授かる。ところが中將は姫と子を残り都へと戻ってしまいその道中で、亡くなってしまふ。姫もまた悲しみから帰らぬ人となってしまふ。両親をなくした赤ん坊は、朝日長者が山で助けた猿がお菊という女中になって育ててくれた。やがてその子は猿丸大夫と名乗り、立派な武将となった。



037

037 長岡の天王桶 / 10分

早くに父を亡くした田吾作は、母を手伝い、畑仕事や幼い兄弟の面倒をみる日々を送っていた。そんなある日、母親が高熱で倒れてしまった。田吾作が八雲神社に願をかけた満願の日、「境内の井戸の水が霊薬になる」と聞き、急ぎ母親に飲ませると、すぐに元気になった。この水はそれから「金明水」と呼ばれた。



038

038 香野姫明神 / 10分

京の都に住む歌人の藤原実方朝臣はいざごに巻き込まれ、天皇から「陸奥の国の歌枕を見て参れ」と命を受けた。樵明神に教えられ、最後の歌枕を見た実方だったが、帰りを急ぐあまり落馬し命を落とした。一方、実方の帰りを待つ香野姫は、思いを募らせ後を追うが、実方に会えぬまま病に倒れて息を引き取ってしまう。



039

039 虎捕山の白狼 / 10分

昔、橘墨虎という凶暴な山賊があり、源頼義は里人から討伐を頼まれる。家来の景道が討伐に向かうが、墨虎だけは捕まえられなかった。数日後、頼義の夢に山神が立ち「白狼の足跡を追うべし」というお告げを聞く。翌日、景道がお告げ通りに足跡を追って墨虎の首をとり、村は平和になった。



040

040 狸森の託善和尚 / 10分

託善という真面目な和尚はある年、天寧寺の大法要の取り仕切りを命ぜられた。大法要の最終日、託善とともに来た目の見えない行安という修行僧が、託善を探して部屋に入ると毛深い尻尾に触れた。その後、託善は自分が狸であると皆に明かし、お詫びにお釈迦様が亡くなった光景をみせた。終わると、一匹の息絶えた狸がいた。



ご希望のお話にチェックをご記入のうえ、放送申込書と併せてFAXにてご返信下さい。

041 ~ 050 まで10話パックでのお求めはこちらにチェックをご記入下さい。.....

Pack E

041

041 安達ヶ原の鬼婆 /9分45秒

口の利けない姫をもつ大臣に、一人の占い師が腹の中にいる赤ん坊の肝を取り出し食べさせれば治ると告げた。大臣にこのことを命じられた乳母の岩手は、旅路の末、安達ヶ原に辿り着き、娘の恋衣だと知らず身重だった女の腹を裂く。気がふれた岩手は人を喰う鬼婆と化すが、旅僧によって魂を救われるのだった。



042

042 虚空蔵さまと赤ベコ /9分45秒

昔、大地震のために家を失い、虚空蔵さまが祀られている寺も川津波によって流されてしまった。その後再建が中々進まない中、宝海上人は大牛の絵馬を描き、七日七晩祈祷した。すると絵馬から牛が飛び出し、赤牛の群れを連れて木材を運んだ。再建が無事済むと赤牛たちは沢に消え、絵馬の牛も元に戻った。



043

043 玄翁和尚と白狐 /9分45秒

昔、全国行脚をしていた徳の高い玄翁和尚は、前世の悪行がたたり殺生石となった白狐に声をかけられる。触れるもの全ての命を奪うと言われる殺生石であったが、玄翁だけは「魂を救って欲しい」と懇願される。玄翁はこの殺生石を砕き、魂を救って寺に戻ったが、狐は玄翁の前に突然姿を現し、「この地を守る」と約束する。



044

044 陣場村の千海和尚 /9分45秒

昔、陣場にいた徳の高い千海和尚は、村の子供たちに学問を教えていた。ある日、和尚は床に伏せてしまう。村人が見守るなか和尚はお盆に生ものを供え、家の墓参りの前に自分の墓を拝むことを懇願した。「そつすれば村を守る。」と言い息を引き取った。和尚の遺言を守った村は、その後疫病は全く入ってこなくなった。



045

045 天狗の相撲取り場 /9分45秒

昔、あるところに働き者の五次郎という男がいた。五次郎はある日、山で天狗と出会い、相撲を挑まれる。勝負をしないと二度と山には入れないという天狗と、仕方なく相撲を取った五次郎は勝利を治めた。それから毎日、天狗から約束通り倍の量の薪をもらい、嫁も子も出来、幸せに暮らした。



046

046 和尚山伝説 /9分45秒

ある村で、干ばつを起こす大蛇に困り果てた村人たちは、通りがかった老僧に救いを求める。老僧は七連の干柿と勝栗と水を用意させ、山に登り、穴を掘らせて入っていく。それから七日七晩読経の声が聞こえるが、八日目には聞こえなくなる。その頃、葦毛の馬に乗った大蛇が煙出しから逃げ、村に平和が戻った。



047

047 佳老様の一番鐘 /9分45秒

母親と幼い兄弟たちと貧しい暮らしをしていた作蔵は、長老の話しを聞かず、怠けてばかりいたが、ある時、母親が過労で寝込んでしまう。作蔵は、神社の鐘を新年に一番に撞くことが出来れば願いが叶うという話を聞き、大晦日に神社に向かうが、天狗が一番鐘を撞いてしまう。作蔵が天狗に訴えると、翌年作蔵が一番鐘を撞かせてもえ、母親は元気になった。



048

048 怪力玄蕃 /9分45秒

大男の玄蕃は釣りをしていた梁瀬三左衛門の目の前で怪力を見せつけ大変気に入られた。それからは度々屋敷に呼ばれるようになった。しばらくして、玄蕃は越後の力自慢と勝負することになり、見事に勝ち、殿を喜ばせた。敵討ちにやって来た越後の力自慢たちも大内宿の沿道の並木を玄蕃がなぎ倒したと聞いて、逃げて帰っていった。



049

049 くくり頭巾 /9分45秒

江戸時代、くくり頭巾と呼ばれ、人を化かして喜んでいる狐がいた。近くに住む浄念は化かされたと駆け込んで来た加代に頼まれ、狐をこらしめることにした。そして山に入って出会った怪しい少女に浄念があやとりを教えると、上手く出来ずに意地になり、正体を現した。戒められたくくり頭巾は反省し、稲荷神社の使いとなった。



050

050 正和の大日如来 /9分45秒

昔、馬で通ると必ず落馬すると言われた橋を渡っていた又右衛門。ここで落馬し松吉親子に助けられるが、愛馬の今帝丸が命を落とす。次の日、松吉たちと今帝丸を埋葬している途中、不思議な声に導かれ、橋の上で文字が書かれた石を見つける。この石を白山神社に祀ると、奇妙なことは起こらなくなった。

